

幼保小の接続期の教育の質的向上に関する検討チーム  
(第1回～第6回)  
—主な意見の要旨—

※「論点整理のたたき台(案)」中「3. 目指す方向性」の項目に即して整理。

(1)「社会に開かれた幼児教育カリキュラム」の実現に向けた、幼児教育の質に関する認識の共有

- 幼児教育の質とは、そのために特別なことをするというわけでは必ずしもなく、例えば砂場で繰り広げられる活動の中、物との関わりの中で試行錯誤したり、環境を自分で変えていったりという姿の中に見られる。こうした捉え方を小学校の先生と共有する中で、科学的な思考での検証、人との関わりでの言葉やコミュニケーション、協同する力が育つ学びについて、共通理解が進められていけばよい。

(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と各園や地域の創意工夫を生かした幼保小の架け橋プログラムの開発・実践

(目的・対象)

- 国立教育政策研究所による幼小接続期のカリキュラムに関する全国自治体調査の分析結果では、アプローチカリキュラムの開始時期は、9月と10月、1月頃が多いが、4分の1ほどの自治体では、5歳児4月から長期的に位置付けている。スタートカリキュラムの終了時期は、4～5月まで、あるいは7～8月までが多く、あわせると1学期末までが9割近く。一部、1年生の終わりまでを想定するものもある。
- 接続期を広く捉えすぎると視点がぼやけてしまうが、5歳児の成長はそれ以前からの積み重ねによるものなので、接続期前後も視野に入れる必要がある。
- 狭くすればするほどかっちり決まってしまう、柔軟性がなくこうすれば良いというイメージが強くなってしまうので、5歳児から1年生あたりではないか。幼児教育に関わる人たちも1年生の終わりあたりまでの姿がイメージでき、小学校側も5歳児の姿がイメージできて共有できていくような幅を持つことが重要。
- 子供の育ちがぐんと伸びてくるのは後半。先生は担任したところで保育の視点を決めて行くが、やらなければいけないことが先立ち実践が追い付かないこともあるので、先生をサポートする意味でもプログラムは5歳児から小学校1年生がよい。
- 接続カリキュラムをもう一度評価しながら、改定作業を進めていくことが大事。ここまでがアプローチ、ここからがスタートと分かれるのではなく、5歳児から1年生といった年間にまたがるものがよい。交流や研修の計画を年間で推進していくので、年間で考えた方がよい。家庭との連携を意識できるとよい。
- 対象は5歳児～小学校1年生がよいと思うが、5歳児後半～小学校入学当初のように狭い例を多く出して、それをコアに各自治体等で工夫する戦略も考えられるか。

- 地元の市で作成しているカリキュラムは、5歳児後半～小学校入学当初。幼児教育そのものを社会に開かれたものにするために、プログラムは3歳児から丁寧に説明する必要があるので、3歳児～小学校全学年も視野に入れた方がよい。
- スタートカリキュラムは、「入学当初2週間」もあれば、「2か月程度」「1年生」もあるのが現状。接続プログラムの期間が、スタートカリキュラムを超えると、新しく作る必要が出てくる。
- スタートカリキュラムが短期間の学校探検にとどまっているような例もある。幼保小で学びをつなぐことを想定した接続期の設定が必要ではないか。

### (モデル事業を通じた開発のイメージ)

- 架け橋期のカリキュラムが実効性を伴うためには、園と小学校関係者だけでなく保護者や地域の関係者、有識者にも開発会議に参画してもらう必要。この街をいい街にしていきたいという動機づけが大切。充て職ではなく、やってみたいという保護者、関係者、有識者の参画を求めたい。
- 開発会議では、事例で議論していかないと、幼保小間で先生の認識にずれが生じる。例えば、幼児期の事例では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにこういう姿が育っていると、小学校の先生にも分かってもらう。小学校の事例では、幼児期の育ちを受けて、こういう授業が成り立っていると、子供の育ちを議論することが大事。さらに、実際に園・学校に行ってみることが大事。
- 小学校と園が連携することで、子供が自分らしく生きられるという事例を持ち寄り、話し合いができることが大事。
- 大事なことは、園と小学校の先生が互いの教育を理解する時間を取ることと、話し合いの場をどれだけ設定できるかということ。架け橋期として、幼児教育と小学校教育を互いに理解するための基礎資料を国が提示するとよい。
- 幼児教育施設は、教育委員会、幼保支援課、こども園課と所管が多様で、各課が園や学校に指導助言するのか、教育委員会が中心になって指導助言するのか。
- 「カリキュラム」と「接続期カリキュラム」の用語の整理が必要。
- プログラムは、カリキュラム開発であり、各自治体の創意工夫が探究され、自分の地域で学びの連続性を探究するということを、明確に打ち出す方がよい。
- 子供たちの経験をベースに次にやることや、子供たちの姿を捉えながら、途中で振り返って変更できる仕組みが大切。決められたカリキュラムに沿って、みんなが同じように同時に学ぶ形にならないようにすることが大切。

### 〔①カリキュラムの作成・実施の視点〕

- 適切に構成されている接続期カリキュラムには、次のような特徴が見られる。
  - ・ 育ってほしい子供の姿や育てたい力が明確に自治体で共有されている。
  - ・ カリキュラムの柱立てや関わり・指導の具体的な視点が、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの両方に位置づいており、つながり（接続）が明示。
  - ・ カリキュラムに、交流連携計画、環境構成や授業の工夫、援助・支援や指導の工夫・配慮、家庭との連携、特別支援が位置づく。

- ・実践事例・例の具体例が提示され、柱立てに沿って考察され、事例の中で幼保小のつながりを示す工夫がされている。学びや育ちのつながりが見えやすい。
- 国立教育政策研究所が実施した「育ち・学びを支える力」を捉える質問紙調査の結果によれば、幼稚園保護者、小学校保護者、小学校教師のモデルでは、「好奇心」が「学び・生活の力（生活習慣を除く、読み書き、言葉、数、分類）」に影響しており、興味関心や試行錯誤、工夫、振り返りなどが、学びの基礎となっていることが伺われた。
  - また、小学校保護者と小学校教師のモデルでは、集中してあきらめずに挑戦し、最後まで取り組む「粘り強さ」が「学び・生活の力」に影響。
  - 5歳児から1年生への影響について、幼稚園保育者、小学校教師のモデルでは、幼稚園の時の「好奇心」「自己主張」「自己調整」の高さは、小学校入学後のそれぞれの高さを予測するとともに、幼稚園の「好奇心」と「自己調整」が小学校の「粘り強さ」に、幼稚園の「自己主張」と「自己調整」が小学校の「協同性」に影響。
- 手引の前文には、全体の趣旨が分かる解説的なものが必要。
- 架け橋プログラムの取組のイメージの次に、「架け橋プログラムにおいて大切にしたいこと」を持ってくる。モデル地域だけでなく、全国的に行うことなので、フェーズの図より先に、開発会議での架け橋期のカリキュラムのイメージがある方がよい。
- 開発方法に、「モデル地域内の園・小学校において、架け橋期のカリキュラムを踏まえつつ教育課程編成・指導計画作成、実施」とあるが、フェーズの方では、「接続を見通し、各園・小学校で教育課程編成・指導計画作成」の次の段階に、「カリキュラムの検討・開発」となっていて、順番が逆になっている。後者のように、教育課程や指導計画を見直しながら作成していくことで、架け橋期のカリキュラムを開発・充実させていく流れではないか。
- スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムが別々に策定され、理念を共有することが難しいという課題がある。手引きでは、スタートカリキュラムが、架け橋期のカリキュラムにどう位置付けられるのかが組み込まれていくことで、身近なものとして考えることができる。
- 接続期に直接関わる低学年の先生だけではなく、学校全体で取り組んでいく必要があり、小学校6年間の学びや生活の基盤をつくる大事な時期であることが大事。平成27年1月の「スタートカリキュラム・スタートブック」でも、スタートカリキュラム・マネジメントで、学校全体で育てよう6年間の土台ということで、共通理解を進めている。
- 子供の姿の変化や教師の理解の深まりなども重要。こういうことをやった・できたということは必要だが、子供がどう育っていったかも盛り込んだ方がよい。
- 架け橋期のカリキュラム開発では、6年生等の意見を聞く機会があるとよい。
- 架け橋期の教育の質保障（国）のイメージに、「先生の指導方法の変化や意識の変化」とあるが、プロセスを評価するようなスケールが必要。
- ウェルビーイングに関する記載を増やしてほしい。
- 架け橋のプログラムが、全ての子供の可能性を引き出す令和の日本型学校教育の土台になることを明確に出していくことが大事。全フェーズを通して大切にしたいこと

の1つ目に、特別な配慮を必要とする子供を含めたウェルビーイングも大切に架け橋期を明確に示したらよい。

- 幼保小連携の課題について、なぜ小学校の教育方法の改善に踏み込む必要があるのか、なぜ施設類型の違いを超えた共通性が見えてこないといけないのかという点を強調すると、現状を変えていく動機づけになる。
- 現状の課題として、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムがバラバラという状況が示されているが、架け橋期のカリキュラムを作ることによってこういう風になると最初に示し、それから進め方のイメージが示された方がよい。
- 「架け橋プログラムのねらい」は、5歳児と小学校1年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善に当たることに尽きる。また、園・小学校では、相互の教育の内容や方法に関して、保幼小の先生が話し合うことが重要なスタート地点。子供の思いや願いといった、幼小の共通な点にも目を向けるべき。そうした活動が可能となるように、先生の意図を環境に込めることが大切。
- 自治体のところで、関係部局との連携は出てくるが、プラットフォームを確立することを明記したほうが良い。
- フェーズの区切りは、行きつ戻りつ発展していくことを見えるようにした方がよい。自治体により、どのフェーズにいるのかは様々なので、融通が利く示し方が必要。
- フェーズの考え方では、最初に自分の立ち位置を確認する視点として大事なことが挙げられている。現時点で何が足りないのか、何を3年間でやっていかなければいけないのかを話し合っていく上で、見通しと立ち位置が明確に示されている。
- 広報活動のため、分かりやすいものを見せていく必要。保護者の理解を促すリーフレット等も必要。
- フェーズ4の自治体のところは、自治体内に広げていくための方策や発信に向けての支援という視点が追記されるとよい。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら策定できるよう工夫することは重要だが、「手掛かりとしながら」という表現だけでは、なかなか実効性が伴わない。具体的に場面を示すのかなど、手掛かりとする方法も示せるとよい。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとしながら考えていく場面では、国の指導資料を活用しながら理解を深めていくことも考えられる。
- 特色ある取組例として、言葉遊びや運動遊びのみ取り上げるのは、バランスが良くない。
- 「体力強化」という言葉は、子供たちの実態や学習指導要領の文言等を踏まえると、工夫が必要。小学校では、各種の運動を適切に行うことにより、その結果として、体力の向上を図ることができるようにすると書かれている。
- 幼児教育と小学校の「学びに向かう力、人間性等」が、質保障の評価ではやりやすい。小学校は教え込んで練習させるという悪い例ではなく、「学びに向かう力、人間性等」の育成を大切にしているよい事例を取り上げた方がよい。
- 3つの資質・能力は一体的に育むので、「学びに向かう力、人間性等」のみ取り出すことについては、検討が必要。

- 「環境の構成」「環境づくり」の内容や文言の整理が必要。3歳でも主体的に環境に関わって、その世界を楽しんでいる。また、5歳や小学校で「安心」が出てくるが、3歳の初めの時期にも「安心」が基盤になっている。
- 自我が芽生えてくる時期に、子供のやりたいという気持ちを大事にするところでは、3歳未満でも、待つとか見守るということを大切にする。
- 幼児期の段階であれば、遊びを通しての総合的な指導という中で、間接的な指導が成立する。幼児教育として完成しているものが、小学校教育のスタートになった時に消えてしまうところをどう表していくか。
- 環境を通して行う教育について分かりやすく説明し、小学校や保護者、地域に伝わるようにする必要。環境にねらいや願いが込められる。保育を振り返る時に、その日のねらいは何なのか、環境は適切だったのかという視点が大切。そういうプロセスが含まれると、経験の浅い先生、小学校の先生、保護者等にも理解が深まる。
- 子供の思い・願い、問い、つぶやき、考えたこと、発見したこと、多面的に物事を見たり内観したりできる問いかけなど、先生の関わりを大事にしている。先生が、子供たちの興味関心に共感し、その興味の発展を考えている。話し合いなどで興味関心を見える化し、子供が認知し、継続している。環境面では、応答性のあるもの、発達や興味関心に沿ったもの、創造性を膨らませるもののほか、自然物を大事にしたり、人工物を取り入れたりしている。思わずその行動をしたくなるような考え方も取り入れており、触れる機会を多く持てる園舎や園庭の環境の工夫、自分たちで考え準備できるよう、子供の様子や姿を見て環境構成をしている。結果だけではなくて、過程の中で子供の葛藤や心の変化をどう捉えるかを大事にしている。
- 幼稚園の中で子供がいろいろなものに関わりながら、自分なりに予測をしたり、仮説を立てたりして、それを実際に遊びの中で確かめたり検証していくことも大事。観察・実験では、自然との関わりの中で植物の成長や命についても大切。
- 小学校での学習や生活を見通した幼児教育の工夫の例について、幼児教育での学びが小学校の学習の素地になっていると整理するのが良い。
- 1時間の中での遊びや活動の構成を考える部分について、子供の発想や思いから活動が展開することも大切にしてほしい。
- 幼児の思いから、子供がどういう動きを多様にし、その経験がどうつながっていくか。小学校でも、1年生の生活科等で、どういう思いから授業が発展していくか。「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」から、1・2年生の終わりとうどうつながっていくのかという示し方をしていく必要。
- 学習指導要領の改訂で、題材や単元を中核に学びを構成するとした趣旨を反映させる必要。子供たちが探究してきたことが生活科の単元につながるなど、単元のつながりで小学校が構成していることを理解した上で、事例を出した方がよい。小学校低学年は、教科間をつないだ様々な実践に取り組めることを示してほしい。
- 接続期の子供の姿、遊びと学びのプロセス、幼保小の先生の関わり、環境の構成や小学校の環境づくりの柱は大事。特に遊びと学びのプロセスについて、先生の関わりを家庭・地域に発信していく視点を入れるとよい。
- こういう視点から子供の姿を見ていくとこんなに豊かになっていくという視点が、

「遊びと学びのプロセス」。活動の中で、「選ぶ」「相談する」「振り返る」など、5歳ならではの大事にするところを表す必要。

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、架け橋期はもとより、その後の学びのプロセスを豊かにする」ことが、社会に伝わることが重要。また、幼児が主体的に学んでいく姿が、小学校での個別最適な学びと協働的な学びにつながっていくと、架け橋プログラムの重要性が小学校の先生や地域に理解されるのではないか。
- 子供の姿、活動、環境の関わりを示す必要。加えて、①どのように関係づけ編成するかといった手順と考え方。②どのように具体的に実施するかの方策。③どのようにみとり評価するかの方法。④どのように改善していくかといったカリマネとしての循環の問題。これらが組み合わさることによって方向性が出せるが、小学校に入ると教科がでてくるので、合科・関連や時間の設定という話に関係してくる。
- 架け橋期のカリキュラムの手引きの表現を検討する必要。例えば、フェーズ1の開発会議における準備も、地域の架け橋のチームを作る。地域の実態も、どのような子供の姿だったか考え語り合ってみようというところがある。各園・小学校での教育課程編成や指導計画の作成では、例えば、園・小学校での活動の共有も、まずお互いを見て、子供の経験からカリキュラムを一緒に語り合うところがあり、子供の交流があって、その活動を共有する姿がある。各園・小学校での体制では、自園・自校の先生の意識啓発よりは、参画を呼び掛けていく。自治体における連携強化への支援では、例えば、モデル地域のアイデアを活用していくイメージがうまく伝わることにより、具体的に大事なことが分かる。子供が学んできたことを次にうまくつなげていくこと、それを支える地域のカリキュラムを作っていくこと、各地域で対話が生まれていくことが大事だというメッセージ的なものが入るとよい。
- フェーズ2にある「共通の視点をもとに内容の検討・開発」などは、フェーズ1の基礎づくりに入るのではないか。開発会議の中で、幼保小の理念的なものを共通化し、子供はどう育っていくのかを押さえることが大事。
- フェーズ1で「接続を見通し、各園・小学校で教育課程編成、指導計画作成」とあるが、架け橋期のカリキュラムの検討・開発とのつながりが見えにくい。架け橋期のカリキュラムの検討・開発の「基盤づくり」として、教材としての環境の共通の理解などを具体的に盛り込み、教材をどうつくっていくか共通理解をして、それを教材化し、実際活用していくことが、フェーズ1～3のつながりとして考えられる。
- 小学校の先生と関わって思ったのは、環境の構成、環境を通して行う教育が外から見ると非常に分かりにくいこと。保護者、地域にも伝えられる表現を考えられないものか。
- 教材や環境を分かりやすい形で示すことができれば、保護者や地域の関係者とも一緒に話ができる。特に「架け橋期の教育の質保障（国）のイメージ」の現地調査の視点で、先生の指導法の変化という重要なことが書かれているが、地域の関係者や保護者からも分かるものが示せると一緒に議論できる。
- 園と小学校相互の教育の内容や方法に関する理解の共有、深化、改善・発展と、架け橋期のカリキュラムの検討・開発として人やものとの関わりを通じた学びを踏まえた教材としての環境の共通性の理解、活用、活用の充実の接続ができるとよい。

- 保育にとっての教材とは、子供の思いや姿から教育的視点を持って準備した環境であり、子供が教育的価値を得られるもの。素材も人工物と自然物など様々。自然物も植物、動物、光、風、土や鉱物があり、社会文化の体験や季節、温度、湿度、色彩、時間なども、教育的視点を持って子供の学びにつながるよう整えるのであれば、全てが教材となり得る。教材は、子供の興味・関心、発達に沿っていて、子供と話し合ったり、子供が育とうとしている力を見通したりしながら準備するもの。
- 教材といっても、幼児教育と小学校教育の共通性を導き出して考えていくカリキュラムが見えてくるとよい。
- 教材は、幼児教育関係者と小学校の先生とではイメージや感覚がかなり違うので、共通理解が図れるような示し方ができるとよい。
- 教材や環境などの考え方が分かりづらい。評価スケールのような形があると、小学校と話し合うときなどに議論が深まりやすい。また、保育や授業を見学し、違いや共通点を考えるときに、ポイントとして見てもらうことができる。
- 教材とは何かを伝えていくことが大事。先生と子供の間にあって、学びを助けるもの全てが教材になるが、何を学ぶのかがある程度決められてくると、教材の幅は変わってくる。教材の考え方を共有していることが、幼小中高が一貫していることだと思うので、あえて教材という言葉を解説することが大事。ねらいに沿って教材を選択すること、子供と教材の出会いや関わりを豊かにする視点から、教材の見方を定着させていくことが必要。遊びの中で経験し、学んでいくためにはどういった教材研究が必要か、特に架け橋期のプログラムで求められていることを焦点化し、説明していくことも大事。また、素材の教材化についての説明も必要。相互の内容や方法に関する理解の共有や、教材としての環境の共通性の理解は丁寧に書く必要。
- 「教材」と言ったときに、幼保小をつなぐ教材、考え方の一つとして、言葉といったものも大切にしながら接続を考えていただきたい。
- 幼小接続期のカリキュラムで具体的な内容を書くと、知識・技能と誤解されやすい一方、目標とすべき子供像を具体的に示さないと、カリキュラムも活動も何を評価しているのかが、先生方の自己意識だけで終わってしまう。
- 「学びに向かう力、人間性等」で接続を考えると、非認知的能力が育つことを目標に進めていける。例えば、小学校1年生の算数では「数量や図形に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う」といった非認知的能力が示されている。
- 小学校低学年の体育で遊びや、国語の言葉遊び等については、架け橋を大事にして充実させていくと、小学校の先生方も遊びの本質を大事にした指導ができ、子供たちのこんな事をしたいという思いももっと生かせるのではないかな。
- 市の取組で面白かったのが、小学校が遊びを取り入れたら子供がいろいろと考えて、子供の見え方が変わったということ。
- 主体的・対話的で深い学びが今以上に深く浸透していくことが大事。子供の思いや捉え方も大事にしたい。
- 「主体的・対話的で深い学び」のうち、「主体的」「深い学び」の事例等はあるが、「対話的」に関する内容が少ないように思う。

- 母語の力がないと外国語の力が伸びない。母語の力、五感で感じたことを言語化することが大切だと示されているのはありがたい。
- 家庭との協働が重要で、環境を通して行う教育の意義を理解してもらう必要。家庭との協働関係の構築の好事例を取りまとめてはどうか。
- つなぎ手になる上で、保護者も見通しを持って学校生活を迎えることは非常に重要なので、双方向的な意味で、連携をしっかりと記載するとよい。
- プログラムのイメージが、活動ありきとしないようにする必要。答えを教える、答えを覚えさせる教育観を変える必要。遊びの中で、幼児が問いをもち、話し合ったり調べたりして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が見られるようになっていく。環境を通して能動性を発揮する力を培うことについて、幼保小の先生が理解することが大切。幼児期の学びは、小学校のどの授業にも意味があることを伝えていくべき。
- 幼児期から、自分たちで考え、相談・議論し、生活できる力は育っている。小学校へ行ったら、枠の中に入れようとするのではなく、子供が心を開き、クラスの中に位置づいて、自分はクラスの一員でいて良いということを伝えていくのが良い。乳幼児期は失敗が許され、何度でも挑戦し、粘り強く取り組む力が大切。幼児教育の本質が小学校教育の中にもっと取り入れられると良い。
- 幼児期からの問いや気づきがあって学びが深まり、教科にもつながっていくことが、より強いメッセージとして出る必要。環境の連続性、特に小学校全体ではなく、低学年固有の環境の在り方について、幼稚園や保育所の先生も一緒に考える視点が必要。
- 「幼児教育の工夫」のイメージのうち、数や量と関わる活動で、例が二つとも声掛けになっているが、環境構成や状況のづくりも必要。
- 様々な立場から意見や事例を出し合って話し合う対話、各地域が自分たちの問いを持って考え合うことが、架け橋期のカリキュラムをつくっていく上で大事。対話を通して、子供の姿や教育・保育のありようをともに考え、幼保小の先生たちが納得し合うような場をどうつくっていくのが大事。
- 小学校との接続では、子供のできないところが強調されることがある。架け橋期のカリキュラムを通して、乳幼児期から小学校に子供の育ちがきちんと伝わり、小学校でも受け止めてもらえることが大事。
- これまでの幼保小接続は、5歳児後半から小学校1年生前半に着目しがちだったが、今回5歳児の4月と書いてあるのは、0～1歳児から積み上げてきた5歳児の姿の現れが、小学校1年生の終わりまで、子供の主体性や可能性などの質を高めていくために見直す機会であることが明確に見えることが大事。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を軸にしながら、その方向に向かうためには、小学校も入り口のところを含め見ていくことが大事。幼児期から小学校低学年が、その後の学校教育の土台になるという重要性を共通認識として入れること。ゼロから積み上げて、子供の主体性や深い気づきという姿が、1年生につながることで出せるとよい。取組を進めてきた自治体ほど、2年間の子供の姿を通して、0～18歳までを考えていくきっかけになることが伝わるとよい。
- 1校1園体制のイメージではなく、多様な園が関わり、自治体の特性を生かしなが

- ら地域で考えていくようなメッセージが書き込まれるとよい。
- 保護者を巻き込むことは、幼児期でも小学校でも大事であることが伝わるとよい。
  - カリキュラムとは、生活全体、教育課程・保育課程、指導計画のことを指していて、年長児全体の生活・遊びなどから、小学校1年生の生活や授業・学習とどうつながるかが伝わるようにする必要。
  - 読み手に分かりやすいようにシンプルにできるとよい。フェーズごとのイメージが各ページに書かれているが、関連性が分かりにくい。
  - フェーズ3は1回でも実施・検証していれば当てはまるのかどうか、判断の基準は人の取りようによる。
  - 参考事例のところで、子供の興味・関心等の見える化があるとよい。
  - 架け橋期のカリキュラムは、局所的な部分だけでなく、1年間を視野に入れることがイメージとしてある。各地で使われているスタートカリキュラムとの整理が必要。
  - 小学校には1～3学期や前期・後期の区分があるが、幼児期のカリキュラムは子供たちの生活に合わせる形で時期が組まれており、時間軸が異なる。また、学習指導要領や幼稚園教育要領をベースにカリキュラムを開発・編成するということは、シークエンスとスコープの問題、つまり教科や学習活動をどう編成するかという問題が出てくる。時間軸をどう整理するかというイメージと、スコープをどうするかということを各自治体で考え整備することによって、幼と小を同じにするのか、意図的に変えるのか、アイデアとして出てくる。
  - 「共通の視点から幼児教育と小学校教育がつながる工夫の例」について、最初に期待する子供像を示し、大きな方向性を明らかにした上で、2番目に遊びと学びの連続性の大方針を示し、3番目に具体的に園ではどのような活動をするのか、小学校ではどのような教科等の関連を意識的に構成していくのかが示され、4番目に配慮事項が並び、5番目に架け橋期のトピックとなるような交流を示した上で、基盤となる家庭との連携という意図的な配列になっていて、非常に意味が大きい。各項目について基本的な考え方とサンプルがあること、小学校と幼児期の教育との共通点と差異点を明示していること、あるいは両者のつながりがどうなっているかを書いていることが、大変意味が大きい。この一連の整理は、学習指導要領と幼稚園教育要領とのつながりがどうなっているかを、これまで以上に明確に示した方針になり得る。
  - ①期待する子供像について、「作成」より「設定」という表現を使う必要があり、各自治体の方針や小学校の教育目標も入れておく必要。また、「意識化されない曖昧模糊とした幼児期の資質・能力」は、「個別に意識することが難しく極めて一体的に育成されていく幼児期の資質・能力」の表現が望ましい。②遊びや学びのプロセスについて、「学びの連続性」を「期待する子供像の育成に向けた遊びと学びの連続性」と表現し、①と②が連動していることを明示してはどうか。③園で展開される活動では、園でも配慮する項目を作り、順序を考え直してはどうか。⑤子供の交流は、架け橋のカリキュラムにとって、どういう意味や価値があるのか加える必要。
  - 「園・小学校を通じた工夫の例」では、人と関わる中で、何を体験するのか、どのように人と関わるのかということを書いていくことが重要。活動をすればよいと誤解されない工夫が必要。

- 「幼保小」とあると認定こども園が含まれないといった誤解を与えるおそれがあるが、「園・小学校」とあると認定こども園も取り組む意義を感じながら、自分の園でできることや、何を探っていけばいいのか考えていける。
- 要録についても触れた方がよい。
- 自治体を作るローカルスタンダードをもとに、学校固有のスクールスタンダードを作るときに、両者をほぼ同一のものにするのか。それともローカルスタンダードは少し多様で概観できるようにしておき、各学校が固有性のあるものとして多様に作り込めるようにするのか。この辺のつくり方の具合や、制度設計の関係が示せるとよい。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどこで使うか。一つ目は小学校が始まる、あるいは園が終わる節目。2つ目は2年間の出口。3つ目は仮にカリキュラムを4期に分けるなら、各期の中に意図的に重点化することもできるかもしれない。
- 今回の学習指導要領では、生活科はもちろん各教科で、各学習のプロセスをかなり明確にしている。幼児期でも同様に行われている学びのプロセスが、小学校でも各教科においても意図的に作られており、幼と小が連動することにより、幼児期の学びが小学校に生かされる、あるいは資質・能力が育成されるイメージが持てる。
- 5歳児と小1のカリキュラムをいかに開発するかが本丸。自治体にやってもらうのか、方法や視点を例示するのか。国の教育課程の基準の枠組みの中でどういった開発ができるのか、オリジナルのものを作っていくのか、一定の整理が必要。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにするということを、具体的に考えておく必要。幼児期に偏る傾向が出てしまうと、小学校側が参画してくれなくなる。
 

学校教育の体系から考えると、3～4歳の積み上げがあって5歳の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」があるというイメージも必要。集団生活の中で自分の思いを持って力を発揮してくる、幼児同士の関係ができて相談しながら活動に進めていけるという発達の姿がある。それを今度は視点を変えて、1年生の活動からどう見るかが大切。
- フェーズで重要なところは、1から2に立ち上がるころ。5歳児から1年生の2年間を対象としたカリキュラム、幼保小を一貫した共通の視点を共有することによって、次に何を検証するかが明確になる。各園・学校の取組紹介で終わってしまうと、共通の視点は見いだせない。
- 過去の体験のつながりや遊びの中の気づきから、自覚的な学びに向かい、課題の設定までたどり着くためには、課題を共有することを楽しむための先生の援助や働きかけ、環境の生かし方が大切。興味や関心を生かした学びという、主体的・対話的で深い学びになっていく手立てを、共通にしていくことが大事な視点。
- どういうカリキュラムを目指すのかという例があった上で、幼児教育や小学校教育の工夫があった方が分かりやすい。言葉を豊かにする、情報を共有する、自然への興味や関心、数や数量が先にくると、そのためのカリキュラム開発になってしまう。
- 小学校のところには、「安心を生み」という形で書いてあるが、0～2歳から記載があると、根底につながる安心・安定という流れが見える。
- 発達や生活という言葉はあるが、学びをつなぐという形での整理が重要。

- 「継続的に取り組むプロセスを大切にしましょう」とあるが、持続可能な形で無理のない形で取り組めるようにという記載があるとよい。
- 幼児教育施設では先生の関わり方があり、小学校では人との関わり・先生との関わりになっている。安心を生み、成長・自立を支える先生との関わりがあることが入るとよい。
- 入学当初は特に教師の関わりが大事で、信頼関係や安定・安心が凝縮されている。先生と子供の関係性をしっかり作っていくことが大事だということを、接続では強調してもよい。
- 小学校の立場から考えると、幼児教育での先生との関わりと同時に、環境構成からも学ぶところが大きいので、環境構成や環境づくりも入るとよい。
- 「環境が有する子供にとっての教育的価値に着目」という言葉は重要。何を体験してほしいのか、先生の意図に応じて遊び、環境を提示していることを伝えていく、そこから環境や教材の持つ教育的な価値を捉えて、小学校の先生方にも具体的な実践を通して子供の姿を語り合う。そうした視点を自分の姿とうまく重ね合わせながら伝えていくことも、幼児教育と学校教育をつないでいく一つの視点。
- 1日を通して認定こども園は教育及び保育を行っており、保育所は保育を行っているが、その内容や配慮について、手引きの中で示す必要はないか。
- 幼稚園固有の用語や枠組みには注意し、幼稚園、保育所、認定こども園三方に通ずるものとなるように工夫してほしい。
- 場や先生の存在がもつ意味について、子供から見たときに、それが変化していくとはどういうことかという視点を持てると、子供たちも安心して環境移行を迎えられる。各フェーズの中でも意識してほしい。
- 教師も保育士も、業務負担の軽減や仕事の魅力の向上が大きな課題。幼保小連携の取組が、新たに大きな負担が生じるという受止めにならないよう、会議の持ち方や情報共有に柔軟な工夫が必要。連携が進み、子供の育ちにお互い見通しを持てることで、保育・教育の質が上がっていく。仕事の魅力が上がっていくことも裏表の関係。
- 「全ての幼児に格差なく」と考えると、様々な子供たちがいる中、一人一人の育ちのプロセスを、小学校の生活で困らないようにするだけでなく、多様性をどう尊重していくのが大切。今持っている力を十分発揮した上で、先生側が学びや気づきをどうキャッチし、次のステップにつなげていくか。特に、多様な背景や特性を持った子供たちについての視点が大切。保護者、地域、園によっては地域性が非常に強いところなども関係してくるので、関係機関との連携等も視野に入ってくる。
- 「子供の自発的な交流」とあるがイメージがしにくい。
- 「子供の自発的な交流」は、子供同士が交流した話で終わりにならず、手紙を書いたり、つながりが小学校・園でも起こったりすることが大事。学校だけでなく社会に開かれた形で、地域でも子供たちの輪を創り出すイメージにつながっていくとよい。開発会議で最初に大事なことを示し、方向性が見える手引になると、分かりやすく現場に伝わっていくものになる。
- カリキュラムの作成・実施だけではなく、評価・改善までを含める必要。地域内で対話をし、もう一度一緒に作っていくイメージ。

- 園と小学校が、子供の育ちを見合えるような場があり、自園の保育や教育をどう見直していくのかが、改善・発展のサイクルでは大切。
- 評価の具体的な在り方として、子供の興味関心から発信するドキュメンテーション、日々の様子を写真とともに発信するポートフォリオ、個別のエピソードの記録を作成している。ポートフォリオの裏には、ねらいや子供の姿、興味の広がりなどを記載して、保護者にもエピソードと一緒に渡し、コメントをもらっている。
- 参考資料の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方について、自然への関わり、生命尊重のところに書かれている内容は、クレープ屋さんどう結びつくのか。豊かな感性と表現のところで、子供たちがクレープ屋さんになり切って動いたり話をしたりすることも入れていくとよい。
- 参考資料として、小学校の教育課程・指導計画の例を示してほしい。
- 参考資料の生活科アサガオの栽培の事例では、幼児期の経験や環境を通して行う教育について、指導上の留意点にどう落とし込むのかを示すことができれば、小学校の先生方にも、単元・授業づくりの時に参考になる。こうした資料を基に話し合いをすることで、単元・授業づくりのレベルから、実際の授業で子供の活動がどうだったかなどを、共通の視点で考えられる。
- 参考資料の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と先生の関わり・環境の構成や小学校へのつながり」の表は、小学校へのつながりに具体性を持たせた方がよい。

## 〔②運用方法〕

- 架け橋プログラム、評価や公開保育なども含め、自ら質を上げていきたいと自治体が思えることが大事。街ぐるみで小学校教育と一体化した幼児教育の質向上が、子供だけでなく、保護者や先生のウェルビーイングにもなる。ノーコンタクトタイムや働き方改革が、先生のウェルビーイングにつながる。
- 考え方としては共通していても、無意識で使っている言葉には保育所にはなじみがない言葉もある。保育士自身が自分もプログラムの一員だという感覚をしっかりと持ちながら参加し、小学校での生活や学習に保育所での生活や学びがどうつながっていくのか具体的なイメージが持てるよう、対話を大事にすることを盛り込んでほしい。特に保育所管部局の中では、保育の内容面に特化した担当者がいるかないかというのは自治体によって差がある。担当者が手薄な自治体も含めて、どう進めていけばいいのかということが提示されるとよい。
- カリキュラム開発に当たって自治体の支援は重要。地域ごとに多様性が求められるが、基本のところアドバイスしてもらえると具体的に開発していくことができる。
- 働き方改革に資するという意味で、自治体の支援として、幼保小の合同研修などでウェブ会議等の活用も考えほしい。
- 自治体の支援として、カリキュラム開発の支援や、その体制づくりが明示されると心強い。子供の交流はもちろん、教員の交流、連携の計画をきちんとカリキュラムに位置づけることは非常に大事。コロナ禍や遠方で対面が難しい状況では、カリキュラム作成や交流等が難しい。連携・交流の在り方や工夫がモデル地域から提示されるとよい。実地調査の視点として、園や小学校の先生の手応えといった部分も聞けるとよい。

また、それを支える自治体の担当者やアドバイザーの変化等も含まれるとよい。

- 自治体の支援について、研修の実施、推進、充実と発展形になっているが、もう少し具体的に書き込んだほうがよい。カリキュラム開発を支援していくためには、その中心になる人が集まり情報交換する場を設けるなど、イメージするものも示せたらよい。また、各園が、架け橋期のカリキュラムに基づいた独自のカリキュラムを開発できるような支援体制、例えば、各園の中心になる人が情報を得る機会を設け、各園に戻って成果を普及していける体制を書き分ける必要。同時に、その成果を発信していくことも自治体の役割。「支援」「推進」「充実」という言葉を整理して書き分けていく必要。
- 各園のカリキュラムの中に、プログラムの趣旨を受け止め、作り直しながら実践していくプロセスがある。園内研修等を通した先生の資質向上、カリキュラム実施のための環境の整備なども重要。カリキュラムだけでなく、一体的に評価する必要。カリキュラムの構造、計画されたものと実施されたもの、学びの姿を整理していく必要。
- 小学校側と園側と両方が交換のような研修ができることが大事。ティーチングとしての指導方法だけでなく、相手の力や意欲を引き出すコーチングやファシリテーター力など、コミュニケーション能力を身につけられる研修は有効。
- 先生方の研修や連携の体制がプログラムに位置付けられるとよい。
- 複数の学校・幼児教育施設が一緒になってカリキュラムを作ることが大切。
- 全ての先生の参画による体制とあるが、研修等で特定の先生だけが参加し、全体に広まらない課題もあるので、フェーズ1・2の辺りから全ての先生に参画してもらい、一緒に理解を深めていくことが大事。年間を通して、どこかでは必ず参加し、一緒に考えていくやり方の工夫は必要。
- 公開保育や授業参観の機会をつくるなど、幼保小が互いに関心を持ち、スタートカリキュラムをやる体制が整っていないと、3年間では体制が整わないのではないかと。既に体制が整っているなら、実践が子供たちを生き生きさせることについて、行政や保護者等の第三者に伝えていくことにより、教育・保育の質が高まったり、先生の意識や授業の在り方が変わったりする方向に向かえばよい。
- 「研修教材の開発」は、モデル地域に限らず、地域ごとに自分たちの研修に使う教材を開発・活用していくことなのか、モデル地域で開発したものを参考に国として教材を示していくことなのか分かりにくい。
- モデル事業の委託期間について、接続期の取組としては1年間では厳しい。受託地域で重点課題を選択できる仕組みの方が、現場がモチベーションを維持しながら、取り組みやすい。
- 「自園・自校の先生への意識啓発」にとどまらず、参画することが大事。例えば、各園で接続期のカリキュラムをつくるのは、一面的で見方が偏ってしまうこともある。他の園と協力しながら園内研修をするなど、小学校・園の研修体制も丁寧に書く必要。
- 架け橋プログラムが全国に広まっていく中で、いつの間にか監査項目のようなものになってしまい、施設が苦しくなるようなことがないように進めていきたい。
- 園と小学校のフェーズで園務分掌や校務分掌など連絡窓口を位置づけとあるが、保育園では聞き慣れない言葉なので、具体化が必要。
- 園・小学校への助言・支援について、幼児教育アドバイザーや架け橋期のコーディネ

- ネーターがキーになるが、具体的にどういう人材を想定しているのか示せるとよい。
- 園や学校の先生方が安心して事業に取り組めることが重要で、自治体では、先生方が理解できるよう説明できる必要。園・学校と関係機関・団体とのコーディネートは、園・学校と一緒にやる必要があるため、フェーズ2・1 辺りから入ってきてよい。
  - モデル地域における取組のイメージの中にも合同会議が入り込んでくるなら、イメージが湧くような文字を入れ、自治体が先生方とうまく話ができるようにするとよい。

#### (幼児教育推進体制を通じた普及)

- プログラムを作ると同時に、どういう施設について、どういう部署が担当して、どのような手法で広げていくのかを検討することが大切。
- プログラムを公私・施設類型問わず周知していくためには、幼児教育センターや幼児教育アドバイザーの役割が重要。
- 形をまねたり、ただ作ればよいと思われてしまったり、何かしら評価されるとなると、どこまで幼児教育のよさを浸透させられるか。子供理解を共通化していく必要。
- プログラムは単一的なものではなく、柔軟さや子供の意外性があったり、驚いたり、楽しいからみんなでやろうといったような、教育のあり様を揺さぶるものがよい。子供の対話の中から面白いものが生まれていくあり様を考えていくことが大事。
- 小学校は教育委員会が管轄しているので、幼児教育推進体制と教育委員会が連携し、一緒に架け橋プログラムをやっていくことを明示した方がよい。
- 今回のプログラムがこれまでと違うのは、スタートカリキュラムだけではなく、5歳児と小学校1年生の2年間を考えるとということ。例えば、1年生の終わりの子供の姿について、園の先生が見通しを持てると、随分違うという話を自治体等から聞く。小学校の先生にも、一緒にやると良いものだと思ってもらえることが大事。幼児教育推進体制を通じて事業の成果を全国へ普及するとなると、結局、小学校側は協力する立場と捉えられてしまう。教育委員会等を通じて小学校へ成果を還元していくことや、幼児期からの育ちをどうつなげていけば良いかを考えてもらうことが、従来の幼小連携と異なることを明確にする必要。幼児期の主体性や遊びの中で培ったものが小学校でも生かされていく、1年生の姿はどうあったらいいのかを、先生方が意見を言いながら考えていくことにより、プログラムができていくことが見えるようにするとよい。学校側にも園側にもこういう協力が可能だということが伝わっていくとよい。
- 架け橋期のプログラムの開発が、3年で終わらず、その後も、各自治体や各園、学校で行われていくようなものをつくっていくことが重要。
- 研究の成果の普及は、3年間の事業終了後ではなく、モデル地域がそれぞれ進めながら、プロセスを共有していけるような形が大事。例えばモデル地域の取組をホームページなどで公開し、他の地域にカリキュラム開発、実施、評価する過程が共有されていくプラットフォームを作ること。従来の国立大附属幼稚園・小学校、特定地区の研究開発モデルを超えて、国と自治体でプロセスが見える化するプラットフォームの構築についても考えていくことで、全国で取組が進んでいくとよい。
- モデル地域外の自治体も、自由に情報を発信できるようにプラットフォーム等を構築し、自治体の歳費による段差がないよう、多様な形で見える化することが大事。

- モデル地域が中心になるにしても、自主的に取り組む地域が増えていくので、そういう地域ともつながる仕組みが何らかの形で必要。
- モデル地域ごとでフェーズの違いがあることは予測できるので、丁寧に好事例を示してほしい。
- 研究の成果の普及について、3年間終了後というよりは、授業参観や公開授業などを行い、養成校の先生も入り込んだりして、年長の保育の一部分を小学校の先生にも見てもらう形も考えられる。

### (3) 全ての幼児のウェルビーイングを高めるカリキュラムの実現

- スタートカリキュラムもアプローチカリキュラムも作っており、課題はカリキュラムマネジメントができていないこと。子供の姿がどう育っているのかを互いに見合い、今のカリキュラムでよいか議論するなど、5歳児の終わりの姿を一緒に考えていくカリキュラムマネジメントが重要。
- カリキュラムを園が作っていることを前提にしながら、それを見直す視点をしっかりと示していくことが大事。
- ①トップリーダーを中心とした役職ごとの役割。②組織体について、指導体制、運営体制に分けてよい。③研修の内容・体制。④連携は保護者や地域・自治体との結びつきとの問題、幼稚園なら小学校、小学校なら幼稚園といったことが含まれる。小学校は時数の問題がでてくるので、時間に関する運用が加わる。
- マネジメント的な役割を果たす教務主任などを間に置く組織を作らないと課題に応えるのは難しい。
- ウェルビーイングを高める観点から教育活動を改善・充実するためのカリキュラムの評価・改善として、より多くの子供たちに選択の自由があること、子供の持ち味を把握し生かせる体験ができること、小さなことでも言葉や思いが形になって進んでいく成功体験、集団と個のバランスが取れている状態などが考えられる。

### (4) 幼児教育推進体制等の全国展開による、幼児教育の質の保障と専門性の向上

#### (研修)

- できるだけ多様なモデルを示すことが大切。幼小接続が進まない要因の一つは、複数の幼稚園から複数の小学校に行く接続だから。どうすれば共通理解ができるのかも示していければよい。合同研修を一から企画するのが難しければ、各園が企画した研修に互いに声を掛けるなどが無理のない形。
- コーディネーターと合同研修は期待が持てる。その質や研修内容によって大きく変わるし、保育所だけ、幼稚園だけでなく、本当の意味で理解できる資質が大事。
- 特に認定こども園は、施設の由来によって研修意識や内容も異なる。地域の中での施設類型を超えた研修、学び合えるネットワークづくりみたいなものへの工夫が重要。
- 質の向上に向けた取組を園努力だけで行うのは難しい。保育園ではシフト制の勤務形態が多く、研修や話合いの時間を作るには工夫が必要。国の政策との連動が不可欠。

- 架け橋プログラムを実行性あるものにするため、研修や教材が重要。自治体中心に進めることで、プラットフォームとなり、小学校など学校種や設置者を問わずに参加しやすい研修等が可能となる。オンライン録画配信により、シフト制を組んでいる園でも、教職員も見ることができる。小学校の先生や保護者、地域の方など、環境を通して行う教育など理解が難しい内容について、解説を聞きながら見ることができる。
- キャリアステージごとの研修は、しっかりやっていく必要。子供観や子供の視点を入れていく必要。
- 幼児教育と小学校教育では、教育課程の構成原理は異なるが、指導計画の段階では教師の関わりや教材の考え方などでは共通事項がある。人事交流や職場体験を通して、相手の教育について実感を伴った理解が大事。

### (幼児教育推進体制)

- 体制を地域に広げ、地域が学ぶ仕組みづくりが大事で、団体と行政がどうつながるかが鍵。行政が入ることで幼児教育推進体制はよくできていくが、団体の研修体制をどう組むか。県内の体制づくりや市町村との連携など細やかなバックアップができて初めて推進体制となる。
- 小学校で取組を広げ継続するのが難しい。プラットフォームが教育委員会にできたり、幼児教育センターとも連携したりするなど、重層的な体制がほしい。
- 実施の時に、コーディネーター的な人材が育っているのが良い。幼児教育アドバイザーだけでできないなら、保幼小のコーディネーター的な人が必要だし、幼児教育センターのアドバイザーだけでなく、小学校側の指導主事にもそういった役割の人がいて、両者が連携していくよう関係を密にしていく必要。
- キーパーソンがいて、コーディネーターが園と小学校を繋ぐという好事例もある。
- 接続カリキュラム・幼小の接続と研修を組み合わせて進めていくことが大事。幼児教育アドバイザー、幼児教育センター、養成大学等を含む連携システムを作る必要。
- 自治体の保育部局、教育委員会、幼児教育センターとの関係性も、非常に連携がとれているところと、普段の情報共有もままならないところなど様々に課題がある。国としてどう支援していくかも考える必要。
- 架け橋期の質保障なので、幼児教育支援体制に加え、自治体の教育委員会とも連携して普及していく必要がある。また、幼保小の全てを意識した表現とすべき。国が自治体の取組を評価するといった一方向ではなく、モデル事業を通してさらに国が作っていくといった双方向の関係がよい。自治体に置くコーディネーターについては、小学校の低学年にも関わることを明記し、5歳児担任等と1年生担任等、園長や校長等、みんなで力を合わせて一緒にカリキュラムを開発するようなイメージが伝わる必要。

### (質の保障の仕組み)

- 海外（「諸外国における保育の質の捉え方・示し方に関する研究会（報告書）平成31年3月」で対象とした国）の現状からの示唆として、国の教育に関わる省が所管部局としてリードし、質保障の全体の体制や構造を構築。

外部評価機関は、所管省とは独立した機関や基礎自治体が担う形で独立実施。

- ・国レベル外部評価機関：ニュージーランド、英国、スウェーデン、シンガポール
- ・韓国（幼保別）
- ・国全体としての共通基準やシステムでなく州を中心とするアメリカとドイツ
- ・実践の質に関しては外部機関が評価を行わないノルウェー

実施サイクルは、2～4年に一度が多い。主に一定の質基準を満たしていないとされる施設への指導や質基準確保。背景にはすべての子供にとって良質な教育をとる思想。

ドキュメンテーションやポートフォリオ等だけではなく、自己評価のためのツール（スケール等）が施設に情報提供され、多様なアセスメント評価を使用。

- 海外では、調査研究として評価尺度が広域に使用されることで、公費の投入によって国や地域で質が具体的にどの程度向上したのか（英国、オーストラリア）、また財源削除の場合に質にどのような悪影響が生まれたか（オランダ）などのエビデンス提示の形としても利用。質評価が個別の園評価等というよりも、国や地域の園全体の質に関わる分布や政策立案とつながって使用。
- 英国では非認知や身体運動等のバランスを考えた評価スケールも開発。日本国内でも団体や研究会が自己評価スケールを作成。
- CEDEP 全国調査 2015 では、プロセスの質に関する保育者の関わりについて複数の保育の質スケールに基づき質問調査項目を作成し全国調査を行った結果、複数の観点の中でも、特に「受容・共感・傾聴（1・3・5歳児クラス）」「集団での遊び・活動の支援（3・5歳児クラス）」の自己評定は高く、ここに日本における保育の特徴や良さを見出すことができる。一方、「好奇心・探求心をふまえた遊び・活動の支援」（3歳児・5歳児クラス）、「温かく受容的な雰囲気」（5歳児クラス）は他の観点に比べて自己評定が低かったことから今後より「好奇心・探求心をふまえた遊び・活動の支援」の推進が重要なことがわかる。

「子ども・保護者対応に関する負担感」や「素質材教材や研修時間の不足に関する負担感」を強く感じている保育者ほど、関わりの質のスコアが低かったことから何を改善すれば保育プロセスの質向上につながるかが見えてくる。保育の質評価スケールを基にした質問紙項目調査でも国全体として進むべき方向やその改善に寄与する要因をエビデンスを基に示唆は可能。

- 日本の保育のよさや強み、独自性を保ちながら、国際的にもよさを発信していくことが今後ますます求められる。課題に対しては、負担感の軽減とともに、国際的な動向をふまえて諸外国の先進的な取り組み等に学ぶことも重要。
- 海外の動向から見ると、我が国の場合、プロセスの質に関する外部評価は十分に実施されているとは言えない。我が国の特徴の一つとして、ECEQ や保育所でも地域での自主公開保育等によって、外の目をいれることが試みられており、公開保育は地域のネットワーク形成の契機を示している。海外では保育の公開は研修の一部に位置付けられても、それだけでは質向上がどのように変化したかが見えにくいいため、一般には評価とは呼ばれないことが多い。
- 日本でも自己評価のスケールも開発はされ、海外からのスケールの翻訳もされているが、必ずしもそれを継続的に使用して質向上につなげている例は少ない。

- 多様な質評価の在り方の知識を関係者が広げるとともに、実際に評価をするための時間や支援できる人材、財源などの検討を行っていくことが必要。
- エビデンスに基づく政策形成（EBPM）の動向を鑑みた時に、園単位の自己評価としての園（学校評価、認証評価）、保育所の自己評価のためのガイドライン等はあるがそれは各園の努力に期待し、帰すものが多い。幼児教育が無償化されたこととも連動して、またすべての子供の可能性を引き出すためにはEBPMが必要になっていく。
- 財源や時間、人材の確保と園の保育の質評価のエビデンスをつなげて論議できる体制の構築が今後求められる。国や自治体の政策と質向上のための評価がどのようにつながればよいかを考えていくことが必要。それによつてはじめて、カリキュラムやプロセスの質と構造の質の関連をエビデンスをもって議論できるようになる。
- 海外でも幼小の移行や接続と質評価を連続させては議論されていない。日本は幼小連携・接続に関して、世界的にみても先進的な試みをしている。各学区で学校や園のカリキュラムマネジメントと幼小の連携接続をつなげて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」など子供の姿ベースで接続カリキュラムの評価を協働して考えていくことが求められる。
- 国立教育政策研究所の幼児教育の質に関する研究では、ECERS-3 や SSTEW 等を参考として作成した質評価スケール（案）を用いて協力園で試行的に観察評定し、その結果を検討することなどにより、質評価スケールの意義と課題（留意点）を整理。  
 意義としては、①観察の視点の自覚化や②保育者の資質向上。  
 課題（留意点）としては、①保育者の連携の評価の在り方、②発達の時期とそれにふさわしい幼児教育の質の評価の在り方、③直接的な援助と子供たちに任せる時間の往還の評価の在り方、④評価者のトレーニングの必要性、⑤複数の評価者間での協議の必要性。
- 保育の質の評価は重要。日本の場合、自己評価と学校評価が中心で、いかに実効性を高めていくかを考えた時、ECEQ 等の公開保育によつて外部の視点を入れることも非常に大事。小学校の先生や地域の方にも加わってもらい、色々な視点から意見をもらうことで評価の質を高めることができる。
- 評価について、保育士として共感力は強いが、俯瞰的に見る振り返りが難しい。やりがいやコーチング技術も含めて大事。子供の声を拾って活動する中、全体を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を考えたい。
- 子供をどうみるか、見取りが非常に重要。園の先生、小学校の先生、保護者の見取り方は様々。評価の仕方ではそういった点も上手に活用することが大事。
- 園の質の向上として、カリキュラム、プログラムの評価にいかに実効性を持たせるか、継続していくかが、一番悩ましい。現場・地域の自立性的一方、一定の質を担保していくバランスも考えながら進めていくことが非常に大事。自治体の役割や体制をどうしていくのか、家庭と地域をどう巻き込んでいくのかを更に検討する必要。
- 評価を推進することにより、どう質をあげていくのかが社会に見える発信の仕方を考える必要。良いプログラムを作っても、財源や人材がなければ絵にかいた餅で終わる。幼児教育推進体制と架け橋プログラムが一体となって考えていくことが大切。

- 自己評価を行うインセンティブを持たせられるか。公開保育も何割を目指すか目標イメージが重要。スタートカリキュラムを実際に動かすにはどうしたらよいのか。自分たちのよさを見つけて伸ばすとともに、具体的な改善方策を進めるのが重要。経費、人材的に障害があるのであれば、国や自治体がどう援助するのかという問題もでる。国が予算を付けてテコとして動かせる部分はどこかを議論して見つける必要がある。
- 公開保育や評価のインセンティブとしては、街づくりで考えていく必要。その街をどう魅力的にするか、根幹に次世代の子供がいることで、一枚岩になる視点が欲しい。
- 保育の質の保障は重要だが、現場の過重負担にならないよう、ポイントを絞る必要。子供の興味・関心に基づいて共有していく過程を前提として、①対話の機会を多く持てる環境、②深い学びにつながる質問がなされる環境、③子供が伝え合える、アウトプットできる環境、④ドキュメンテーションや日々の活動、個別のポートフォリオ、展示物など見える化された環境が考えられる。「保育環境評価スケール」等も参考に評価指標を考えることも考えられる。環境が整えられることによって、創造的で協働的な学び、興味の継続や思考の整理、目的の明確化、知識の定着に繋がっていく。
- 自己評価では、他園の見学や園外の研修を園内で共有し、職員との話し合い等を通して自園の課題に気づき、更に話し合い、次に生かすPDCAサイクルを活用している。リーダー層の話し合いや実践事例発表もしている。その積み重ねにより課題を見出し、質が上がっていく。
- 幼稚園教育要領等に示されている教育の目標や内容の基本的な考え方について、園の教職員がしっかりと理解した上で、自園の教育目標を適切に立て、園の特色を生かしたカリキュラムを形成していく視点も重要。
- 評価の根本は、子供理解から始めるもの。自己評価も、保育者同士の評価を受けて保育所が評価する中、自分たちの保育をもっと楽しくする意味での評価をもとにしている。保育内容の評価、保育所による自己評価、外部への公表で循環的に質向上を行っている。架け橋期で各関係機関とも連携しながら進めていければ良い。
- 学校評価、特に自己評価が重要。各園が自己評価にどのような意味を持って、どのような方法で実施するのかを考える必要。園の教育の質が深まるという実感を教職員が持てることが重要。決められた項目に先生がチェックをし、集計したものを組織としての自己評価にしてしまうと、保育の質の保障には繋がらない。実効性のある評価の仕組みづくりを考える必要。第三者評価も、一定の短い時間に来訪し、資料の有無が中心になる評価ではなく、自己評価を豊かなものにし、学校関係者評価、第三者評価につながっていくことが大事。
- 学校関係者評価に長期的に関わっていくことや、参観と園の方針、頑張っていることを外部にわかりやすく伝えること、外部からの評価をしっかりと聴くことが重要。
- 各園が評価を受けたいくなるモチベーションづくりが重要。
- 評価の視点としての教育のプロセスでは、子供そのものは評価に適さないが、子供がどうであるかを問うことは重要。
- 質保障のサイクルも重要。自治体と各園が架け橋期のカリキュラムを実施し、それをどう評価し、どう国とともに改善していくのかというイメージが時間軸として必要。
- 評価は改善点を見つけることが重要。評価のプロセスやサイクルを示した方が良い。

- 保育の自己評価は先生によって異なり、話し合うことで、若手は園の保育を学ぶことになり、ベテランは若手にも分かるカリキュラムの書き方にしようとする。
- 保護者にも質が共通理解されないと、遊びで子供が育つのではなく、英語をやった方が良いと見られることもある。好きなことをしっかりと認めながら、社会と繋がっていくことを支えていく質である必要。子供一人一人を見る、よさを引き出す、子供が自分を出しながら学び合い、探究できる面白さという教育・保育のプロセスが大事。
- 架け橋期の教育の質保障が最重要ポイント。小学校以降に対する意識をもち、小学校を引っ張り出すことを戦略的に考えていく必要。学校種間の連携接続に関することも柱として入れた方が良い。カリキュラムの編成も項目として入れることで、全体として架け橋期で子供が育っているか、具体的に学びは豊かになっているか、運営体制はどうか、総体として連携して機能しているかを入れてはどうか。
- スタートカリキュラムとして最初の段階で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識することは広がっているが、1年生全体までは考えないことが多い。教科等ごとの目標、内容の底流に、資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を1年生全体としてある程度教科横断的に考えていくべき。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、小学校では拘束力はないが、特に低学年では役立つ。例えば、協同性でも共通の目標を持つことや、やりとげるといふところの質や学びの対象の違いがあるが、共通してつながっていくこともある。主体的・対話的で深い学びや、3つの資質・能力から小学校へのつなぎを考えることもありえる。
- 3つの資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をあわせて考えると、認知・非認知能力が組み込まれている。そうしたことを押さえた上で、特に小学校1年生をどうするかは、小学校側の責任者との話し合いが必要。
- 学習指導要領等の改訂は、幼～高校が連続するものとして出来上がっているもので、これをいかに機能させるかが重要。小学校1年生に向けて5歳児から連続するようなものをつくることは要領上にもあり、質保障をチェックしていくときに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が良いのではないか。
- 主体的・対話的で深い学びは授業改善の視点なので、子供の姿としてつなげていくということではない。一つの判断として、要領に明示された姿を1年生にも広げていくことがありうる。学習指導要領上ではそういった仕組みになっていないが、入学当初に意識することは重要で、教科書会社で位置付けているところもあるので、機能してきている。問題は小学校側がカリキュラムの編成や指標としてみるときに、資質能力の3つの柱以外なので、新しいものが増えたというイメージになる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に認知・非認知が一体となって入っているように、3つの柱との関係性を各教科等で整理することは可能。それが見えてくると、要領を実施した上でも、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を評価指標として使うことは可能。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標として広げていくのであれば、学校評価ガイドラインは学校全体で広く見ている。架け橋期ということでも意図的に位置付けて、1年生では、こうした視点でも評価することを別のアプローチからもくさび

を刺していく必要。

- 子供の興味・関心を広げる活動を通して、子供の声を拾い対話するからこそ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、活動の見通しや振り返りに活用することが大事。
- 教育のプロセスに関することで、教材という言葉は特出ししても良い。この時期は、手先が器用になったり工夫が生まれたり、友達同士で共同してしていくプロセスが大事で、教材も必要。子供同士の関係を育てていくことが、学びの深まりにつながる。
- 教材というと、指導する側がこういうことを教えることだけを指す使い方があるが、幼児教育における教材の広義の意味を理解できるような形が良い。
- 教材という言葉が入ることで、幼小がどういった素材を具体的に扱うかという視点が入る。そのことが、非認知のみならず認知系にも連動してくるような5歳児、小学校1年生のつながりが生み出せる可能性。
- 机上にあるものだけが教材ではないので、小学校1年生の教材観も広げていく必要。
- 架け橋プログラムについて、モデル地域ごとにまとめながら全国展開に向けていく必要。成果指標、子供の学びや小学校への接続に子供が生き生きする体制を作るか、育ちが保障されていくことを検証することで説得力が増す。評価は、内部の中でよりよい実践を可能にするための一つのプロセス。また、外部に対して、事業が意味をもつことを示す証拠の提示という面がある。よりアウトカムについて、客観性を求めるかは難しいが、何らかのエビデンスに向けたことを構想していく必要。
- 評価者の研修、委託先と評価者との双方向のやり取りによる改善が必要。
- 行政によるフェーズごとの評価にあたって、ルーブリック等をつくっておいたほうがよいのではないか。

#### (5) 地域における幼児教育施設の役割の認識と関係機関との連携・協働等

- 0歳から5歳までの育ちを連続して捉えることや、2歳・3歳の接続、子育ての支援、地域のセンター的な役割などの特徴があるので、施設の持つ良さを生かしながら、共通のものをどう取り入れるのかという視点で、検討やモデル事業を行うことが大切。